ペリーの旗艦に登った松陰の「時間」に迫る

── ポウハタン号の航海日誌に見た下田密航関連記事について

陶　　徳　　民

How Long Did Yoshida Shoin Remain on Commodore Perry's Flagship in Shimoda on April 25, 1854: Records found from a Log Book of the Powhatan Kept at NARA

TAO Demin

During the author's recent investigation at NARA (the National Archives and Records Administration) in Washington, D.C. of the log books of the Powhatan, the flagship that Commodore Perry used in his 1854 expedition to Japan, Captain William J. McCluney's notes on the "two Japanese" stowaways were found in the Remarks on the Day of April 25th, and the time of getting aboard and being sent ashore recorded here corresponds to what Yoshida Shoin had recalled later in his reminiscence. The discovery of the face will certainly generates further interest among researches and general readers in this well-known "Shimoda story."

キーワード：ペリー、ポウハタン号、マクルーニー、航海日誌、吉田松陰、
下田密航

2009年２月９日、ワシントン D.C.にあるアメリカ国立公文書館で海軍省関係のアーカイブに関する調査を行った。その結果、ペリーの旗艦、ポウハタン号（Steamer Powhatan）のLog Bookすなわち航海日誌の第二巻[1)]（1853年９月11日―1854年９月７日）1854年４月25日のページ[2)] から、吉田松陰の下田密航に関係する記事を見つけた。

記載責任者はポウハタン号の艦長、W. J. マクルーニー（Captain William J. McCluney）大佐であり、記載内容は次の通りである。

1）写真１参照。

2）写真２参照。

Remarks of This 25 Day of April 1854
Shimoda
Commences at 2.45 two Japanese came on board by a small boat, remained about 3/4 of an hour, on getting aboard their boat got adrift & they were sent ashore in the S'（Steamer' s）cutter by order of the Commo.（Commodore）.[3)]

筆者なりの訳によれば、次のようになる。

下田
（午前）２時45分、二人の日本人が小さいボートで乗艦してきて、約45分間滞留した。乗艦した際、彼らのボートが漂失したため、提督の指示で本艦の小艇で岸辺へ送還された。

ここにいう「二人の日本人」とはいうまでもなく、吉田松陰とその従者、金子重之助のことである。密航準備の一環として事前に米艦側に渡された「投夷書」に記した松陰の偽名は「瓜中万二」、金子重之助の偽名は「市木公太」であり、しかも書中において長州藩出身の兵学師範（軍事教官）と足軽であったという真実の身分を隠し、「江戸府の書生」と自称していた。なお、金子重之助は「渋木松太郎」という変名も有していたため、松陰は「三月廿七夜記」という密航の回顧録で金子のことを「澁木生」・「渋生」と呼んでいた。

では、この記事の発見は松陰の下田密航の全容解明、および新しい松陰像の形成にとってどのような意味を有するのだろうか。

第一に、松陰と金子がペリーの旗艦に登った時間、および二人の艦上滞留時間に関する確実なデータを入手できた、と言えるだろう。

私は、近著においてエール大学図書館古文書部で吉田松陰の「投夷書」と邂逅した経験にもとづき、「歴史学の使命と生命の一部はまさに重要な史実の細部をできるだけリアルに再現することにあり、それによってはじめて現代の読者に歴史劇場の臨場感を与えることができるのである」と述べたことがある[4)]。今回の発見も、松陰の下田密航の全容解明につながる重要な一歩である。というのは、密航に踏み切った松陰の行動に対処したペリー艦隊の重要な当事者として、ミシシッピー号の艦長、S. S. リー（Commander S. S. Lee）中佐がその航海日誌において、ポウハタン号乗艦に先立ち、同艦に乗艦しようとしたその事実に全然触れておらず[5)]、ポウハタン号の司令室で指揮を執っていたM. C. ペリー提督の日記も松陰来艦一件に触れていない。松陰を訊問した首席通訳官S. W. ウィリアムズの日記は松陰の密航および「投夷書」を記載しているが、時間関係については触れていなかった。したがって、ポウハタン号のマクルーニー艦長が航海日誌に記した「時間」、すなわち1854年４月25日午前２時45分に同艦搭

3）写真３参照。上記の括弧中の内容は括弧直前の略式表現に対する筆者の解読結果である。
4）『明治の漢学者と中国』（関西大学出版部、2007年３月初版、2008年２月第二刷）、20頁、注25参照。
5）写真４、写真５を参照。

乗、約45分間滞留というデータは、貴重で信憑性の高い史料に違いない[6]。

第二に、少年時代から兵学師範として養成された松陰の厳格な時間観念と驚異的記憶力が今回の発見によって裏付けられた、といえる。

密航７ヵ月後の松陰は、「三月廿七夜記」を著した。そのなかで、「八ツ時社ヲ出テ舟ノ所へ往ク、潮進ミ舟泛ヘリ、因テ押出サントテ舟に上ル」と、身を隠した弁天社から出て、伝馬船を使って密航に踏み切った時間を「八ツ時」であるとし、そして「時ニ鐘ヲ打ツ、凡ソ夷舶中、夜ハ時ノ鐘ヲ打ツ、余曰、日本ノ何時ゾ、ウリヤムス指ヲ屈シテ此を計ル、然レドモ答詞詳ナラズ、〔此鐘ハ七ツ時ナルヘシ〕」と、ウィリアムズの訊問を受け、やりとりが最終段階に達した時間を「七ツ時」であるとした[7]。

これは約155年前のことであったが、太陽暦自体のズレはさほど大きなものではないであろうから、下田における今年４月25日の「日の出」（六つ時）が午前５時１分であることを踏まえると、おおよそ「八つ時」は午前１時40分、「七つ時」は３時20分になることを推定できる[8]。

この推定結果によれば、松陰と金子は1854年４月25日午前１時40分に密航開始、２時ごろにミシシッピー号に辿り着き、２時45分ごろにポウハタン号に乗艦、約45分間滞留して３時30分ごろに同艦の小艇で岸辺に向かって送還され始めた、というシナリオが成り立つであろう。とすれば、訊問最中、艦上の鐘が鳴った時を「七ツ時」、すなわち「３時20分」とした松陰の推定が、送還されはじめる時間を「３時30分」としたマクルーニー艦長の記載とうまく合致していることが判明できよう。

上記で触れた拙著の同じ箇所のつづきで、筆者は「場合によっていままで隠され、あるいは見逃されてきた重大な史実の発見が従来の歴史理論や概括への修正を迫るというようなこともありうるのである。私はこのような史実と史論との対話と相互補完を促進しようとする立場で研究を続け、そこに自分の研究の存在意義を求めたのであった」とも述べておいた[9]。今回の発見は、「国益と人権」の間に揺れる米外交の先駆的事例として分析した下田獄における「第二の投夷書」ほど重要なものではないかもしれないが[10]、松陰の厳格な時間観念と驚異的記憶力の証拠として重視されるべきであろう。

筆者はこのポウハタン号航海日誌における関連記事が、時間観念・空間観念などをめぐる異文化交渉の視点から松陰の下田密航および幕末対外交渉史を再検討する新しい研究のきっかけとなれば、と期待している。

付記：今回、ワシントン D.C.にあるアメリカ国立公文書館での調査について、日本を出発する前NHK

6）二次的史料として、ミシシッピ号の艦長付書記であるW. スポルディングの『日本遠征記』には、松陰が岸辺に送還されたのは「ほとんど午前二時頃」となっているが、誤記であろう。一方、W. ホークスによる公式記録『ペリー艦隊日本遠征記』はミシシッピ号に乗艦しようとした松陰の行動は「午前二時頃」と記しているが、ポウハタン号への乗艦と滞留時間については触れていない。

7）『吉田松陰全集』第７巻（岩波書店、1935年）、413頁、416頁。

8）この推定は、東北大学大学院文学研究科助教で新進気鋭な松陰研究者でもある桐原健真氏のご教示によるものである。

9）同注４。

10）拙稿「下田獄における第二の「投夷書」について―松陰の覚悟に対するペリー側の共感」、藤原書店『環』第14号、2003年７月。なお、拙稿を評した岸俊光記者の文章（2003年８月８日『毎日新聞』夕刊２版掲載）を参照。

のキャスターで立教大学21世紀社会デザイン研究科教授である松平定知氏および渋沢栄一記念財団実業史研究情報センター長の小出いずみ氏の助言をいただき、現地では同公文書館Special Access and FOIA Staff 部門のChiefであるDavid Mengel氏、Textual Archives Service 部門のCynthia G. Fox氏（Deputy Director）、Jane Fitzgerald氏およびChris Killillay氏のお世話になりました。記して御礼を申し上げます。

付録　　下田密航に関する松陰、ウィリアムズおよびホークスの記録

付録 ①

『吉田松陰全集』（岩波書店、1935年、第７巻413-417頁）における「三月廿七夜記」[11)]

三月廿七日、夕方、柿崎ノ海濱ヲ巡見スルニ、弁天社下ニ漁舟二隻泛ヘリ、是究竟ナリト大ニ喜ヒ、蓮臺寺村ノ宿ヘ帰リ、湯ヘ入、夜食ヲ認メ、下田ノヤトヘ往クトテ立出、〔下田ニテ名主夜行ヲ禁スル故、一里隔テ蓮臺寺村ノ湯入場ヘモ、ヤトヲトリ、下田ヘハ蓮臺寺ヘ宿スト云ヒ、蓮臺寺ヘハ下田ヘ宿スト云テ、夜行シテ夷船ノ様子彼是見廻リ、多ク野宿ヲナス〕、武山ノ下海岸ニ夜五ツ過マテ臥ス、五ツ過此ヲ去、弁天社下ニ至ル、然ルニ潮頭退キテ漁舟二隻トモニ沙上ニアリ、故ニ弁天社中ニ入リ安寢ス、八ツ時社ヲ出テ舟ノ所ヘ往ク、潮進ミ舟泛ヘリ、因テ押出サントテ舟に上ル、然ルニ櫓グイナシ、因テカイヲ犢鼻褌ニテ縛リ、船ノ両旁ヘ縛付、澁木生ト力ヲ極テ押出ス、褌タユ、帯ヲ解キカイヲ縛リ、又押ユク、岸ヲ離ル丶コト一町許、ミシッヒー舶ヘ押付、是マテニ舟幾度カ廻リ廻リテユク、腕脱セント欲ス、ミシッヒー舶ヘ押付レハ舶上ヨリ怪ミテ燈籠ヲ卸ス、〔燈籠ハキ（ギ）ヤマンニテ作ル、形圓キ手行燈ノ如シ、蠟燭ハ我邦ニ異ナラズ、但シ色甚白ク心甚細シ〕、火光ニ就テ漢字ニテ吾等欲往米利堅、君幸請之大將、ト認メ、手ニ持チテ舶ニ登ル、[舶ニハ梯子アリテ甚上リヤスシ]夷人二三人出來リ、甚怪ム氣色ナリ、認メタル書付ヲ予與フ、一夷携テ内ニ入ル、老夷出テ燭ヲ把リ、蟹文字ヲカキ、此方ノ書付ト共ニ返ス、蟹文字ハ何事ヤラン讀メズ、夷人頻ニ手眞似ニテポウパタン舶ヘユケト示ス、〔ポウパタン舶ハ大將ヘルリ乗ル所ナリ〕、吾等頻ニ手眞似ニテバッティラニテ連レ往ケト云、夷又手眞似ニテ其舟ニテ往ケト示ス、已ムコトヲ得ズ、又舟ニ還リ、力ヲ極メテ押行コト又一丁許リ、ポウパタン舶ノ外面ニ押付、此時澁生頻ニ云、外面ニ付テハ風強シ、内面ニ付ベシト、然レドモカイ自由ナラズ、舟浪ニ隨テ外面ニツク、舶ノ梯子段ノ下ヘ我舟入リ、浪ニ因テ浮沈ス、浮フ毎ニ梯子段ヘ激スルコト甚シ、夷人驚キ怒リ、木棒ヲ携ヘ梯子段ヲ下リ、我舟ヲ衝出ス、此時予帯ヲ解キ立カケヲ着居タリ、舟ヲ衝出サレテハタマラズト夷舶ノ梯子段ヘ飛渡リ、澁生ニ纜ヲトレト云、澁生纜ヲトリ未タ予ニ渡サヌ内、夷人又木棒ニテ我舟ヲ衝退ケントス、澁生タマリ兼、纜ヲ棄テ飛渡ル、已ニシテ夷人遂ニ我舟ヲ衝退ク、時ニ刀及雑物ハ皆舟ニアリ、夷人吾二人ノ手ヲトリ梯子段ヲ上ル、此時謂ラク、舶ニ入リ夷人（ト）語ル上ハ、我舟ハ如何様ニモナルベシト、我舟ヲハ顧ミズ夷舶中ニ入ル、舶中ニ夜番ノ夷人五六名アリ、

11）原文中の略字、くり返し符号、挿入語句などについては適宜処置し、割注の部分は〔　〕で表示した。

皆或ハ立（チ）或ハ歩ヲ習ハス、一モ尻居ニ坐スル者ナシ、夷人謂ラク、吾等見物ニ來レリト、故ニ羅針等ヲ指シ示ス、予筆ヲ借セト云手眞似スレドモ、一向通セズ、頗ル困ル、其内日本語ヲシルモノウリヤムス出來ル、因テ筆ヲカリ、米利堅ニユカント欲スルノ意ヲ漢語ニテ認メカク、ウリヤムス云ク、何国ノ字ゾ、予曰、日本字ナリ、ウリヤムス咲曰、モロコシノ字デコソ、又云、名ヲカケ、名ヲカケト、因テ此日ノ朝上陸（ノ）夷人ニ渡シタル書中ニ記シ置ツル僞名、余ハ瓜中万二、澁生ハ市木公太ト記シヌ、ウリヤムス携テ内ニ入リ、朝ノ書翰ヲ持出、此事ナルベシト云、吾等ウナツク、ウリヤムス云、此事大將ト余ト知ルノミ、他人ニハ知ラセズ、大將モ余モ心誠ニ喜フ、但横濱ニテ米利堅大將ト林大學頭ト、米利堅ノ天下ト日本ノ天下トノ事ヲ約束ス、故ニ私ニ君ノ請ヲ諾シ難シ、少シク待ツヘシ、遠カラズシテ米利堅人ハ日本ニ來リ、日本人ハ米利堅ニ來リ、両国往來スルコト同国ノ如クナルノ道ヲ開クヘシ、其時來ルベシ、且吾等此ニ留ルコト尚三月スベシ、只今還ルニ非ズト、余因テ問、三月トハ今月ヨリカ來月ヨリカ、ウリヤムス指ヲ屈シ對曰、來月ヨリナリ、吾等云、吾夜間貴舶ニ來ルコトハ国法ノ禁スル所ナリ、今還ラハ国人必吾ヲ誅セン、勢還ルベカラズ、ウリヤムス云、夜ニ乗シテ還ラハ国人誰カ知ルモノアラン、早ク還ルベシ、此事ヲ下田ノ大將黒川嘉兵知ルカ、嘉兵許ス、米利堅大將連テユク、嘉兵許サヌ、米利堅大將連テユカヌ、余云、然ラハ吾等舶中ニ留ルベシ、大將ヨリ黒川嘉兵ヘカケヤイ呉ルベシ、ウリヤムス云、左様ニハナリ難シ、ウリヤムス反覆初ノイフ所ヲ云テ、吾カ帰ヲ促ス、吾等計已ニ違イ、前ニ乗棄タル舟ハ心ニカヽリ、遂ニ帰ルニ決ス、ウリヤムス曰、君両刀ヲ帯ルカ、曰、然リ、官ニ居ルカ、曰、書生ナリ、書生トハ何ソヤ、曰、書物ヲ讀ム人ナリ、人ニ学問ヲ敎ユルカ、曰、敎ユ、両親アルカ、曰、両人共ニ父母ナシ、〔此僞言少シク意アリ〕、江戸ヲ発スルコト何日ソ、曰、三月五日、曾テ予ヲ知ルカ、曰、知ル、横濱ニテ知ルカ、下田ニテ知ルカ、曰、横濱ニテモ下田ニテモ知ル、ウリヤムス怪ミテ曰、吾ハ知ラズ、米利堅ヘ往キ何ヲスル、曰、学問ヲスル、時ニ鐘ヲ打ツ、凡ソ夷舶中、夜ハ時ノ鐘ヲ打ツ、余曰、日本ノ何時ゾ、ウリヤムス指ヲ屈シテ此を計ル、然レドモ荅詞詳ナラズ、〔此鐘ハ七ツ時ナルヘシ〕、吾等云、君吾請ヲキカスンバ其書翰ハ返スベシ、ウリヤムス云、置テミル、皆讀得タリ、予廣東人羅森トカキ、此人ニ遇（ハ）セヨト云、ウリヤムス云、遇テ何ノ用カアル、且今臥テ牀ニアリ、予曰、來年モ來ルカ、曰、此ヨリハ年々來ルナリ、予曰、此舶又來ルカ、曰、他ノ舶來ルナリト、帰ニ臨ミ、我等船ヲ失タリ、舟中要具ヲ置ク、棄置ケハ事発覚セン、如何セン、ウリヤムス云、我カ傳馬ニテ君等ヲ送ルベシ、船頭ニ命シ置ケリ、所々乗行テ君カ舟ヲ尋子ヨ、因テ一拜シテ去ル、然ルニバッテイラノ船頭直ニ海岸ニ押付、我等ヲ上陸セシム、因テ舟ヲ尋ルコトヲ得ズ、上陸セシ所ハ嵓石茂樹ノ中ナリ、夜ハ暗シ、道ハ知レズ、大ニ困迫スル間ニ夜ハ明ケヌ、海岸ヲ見廻レドモ我舟ミヘズ、因テ相謀テ曰、事已ニ至此、奈何トモスヘカラズ、ウロツク間ニ縛セラレテ見苦シトテ、直ニ柿崎村ノ名主ヘ往テ事ヲ告ク、遂ニ下田番所ニ往、吏（ニ）對シ囚奴トナル、ウリヤムス日本語ヲ使、誠ニ早口ニテ一語モ誤ラズ、而テ吾等ノ云所ハ解セサル如キコト多シ、蓋シ渠狡黠ナラン、是ヲ以テ云ント欲スルコト多ク言得ズ、

（後略）

甲寅十一月十三日、野山獄中録之、時天寒雪飛、研池屡凍

付録 ②

S. W.ウィリアムズ著・洞富雄訳『ペリー日本遠征随行記』（雄松堂出版、1970年、284頁、288頁）における関連記載

一八五四年　四月二十五日〔嘉永七年、三月二十八日〕、木曜日

昨夜〔当日午前二時〕、二人の日本人〔吉田松陰、金子重之助〕がわが艦船で合衆国に渡ろうとして艦上〔パウアタン号〕にやって来たが、提督は幕府から許可を得たものでなければ応じられぬとして、彼らの乗艦を断わった。彼らからは、前もって〔前日〕渡航したいと希望し、また艦内ではどんな仕事にも喜んで従事する、としたためた達筆の手紙を受け取っていた。この手紙の趣旨はつぎの通りであった。

［略　投夷書および別啓］

操舵下士官の助けを借りて彼らはタラップを登ったが、彼らが乗って来た小船は運悪く彼らが本船に移るときに離れて漂い去ってしまった。提督は彼らの用向きと上記の書翰についての報告を受けたが、条約の精神に違反して連れて行くことはできぬと断わった。これは彼らをひどく失望させた。だが、私は、便乗する機会もあるだろう他の船舶が追々ここへやって来るに違いないから、今回拒絶されたからといって、そう残念がることもない、といって聞かせた。彼らはボートで陸へ送り帰されることになり、できることなら彼らの小船を見つけようとすぐ風下に向ったが、それを探し出すには海面はあまりにも暗かった。彼らは予期していたよりはずっと平凡な顔つきであったが、明らかに教養のある人物で、二十三歳と二十五歳の青年――日本には扶養すべき両親も子供もない――であった。おそらく、みずから語った通りに、彼らは渡米を熱望している青年であったろう。しかし、われわれのある者は彼らを盗賊と断じ、ある者はいかに条約を履行するかを確かめようとして役人が放った密偵だとし、また、ある者は彼らを亡命者だと考えた。私には、流失した小船に残した刀やその他の持物が彼らを面倒な事件に巻き込むのではなかろうかと気がかりであった。果して、それが港の巡邏船の一隻に発見されたのだ。（後略）

付録 ③

F. L. ホークス編・オフィス宮崎訳『ペリー艦隊日本遠征記』（栄光教育文化研究所、1997年、第１巻421頁）における関連記載

翌日の夜、午前２時ごろ（４月25日）、蒸気艦ミシシッピ号の艦上で夜間当直をしていた士官は、舷側についた小舟から聞こえてくる人声に呼び起こされた。舷門にいって見ると、２人の日本人がすでに舷側の梯子を登ったところだった。話しかけると、乗艦させてほしいと身振りで示した。

彼らはなんとしても艦上にとどまることを許可してほしいと願っているらしく、乗ってきた小舟を惜し気もなく放棄する意思を表わして、海岸には戻らないとの決意をはっきりと示した。ミシシッピ号の艦長が旗艦に行くよう指示すると、彼らは小舟に引き返して、すぐさま旗艦に漕いでいった。港内の波が高かったため、いくぶん苦労しながら旗艦に達し、梯子にすがって舷門に登るやいなや、故意か偶然か、小舟は舷側を離れて漂い去った。甲板に着くと、士官が提督に２人の日本人が現われたことを報告した。提督は通訳を送り、２人と話し合い、不意の訪問の目的を聞き出させた。彼らは率直に、自分た

ちの目的は合衆国に連れていってもらうことであり、そこで世界を旅して、見聞したいという願望を果たしたいのだと打ち明けた。こうして、士官たちと陸上で出会い、そのひとりに手紙を渡したのは、この２人の人物だったことが分かった。舟を漕いできたため、２人ともひどく疲れているようだった。彼らが立派な地位にある日本の紳士であることは明らかだったが、その衣服はくたびれていた。２人とも２本の刀を帯びる資格があり、ひとりはまだ１本をさしていたが、残りの３本はすべて小舟の中に置いてきたので、舟とともに流されてしまっていた。彼らは教養ある人物であり、標準中国語を流暢かつ端麗に書き、物腰も丁重で非常に洗練されていた。提督は彼らの来艦の目的を知ると、自分としても何人かの日本人をアメリカに連れていきたいのはやまやまだが、残念ながら２人を迎え入れることはできない、と答えさせた。そして、２人が日本政府から許可を受けるまでは、受け入れを拒絶せざるをえないが、艦隊は下田港にしばらく滞在する予定だから、許可を求める機会は十分にあるだろうと言って聞かせた。提督の回答に２人は大変動揺して、陸に戻れば首を斬られることになると断言し、とどまることを許してもらいたいと熱心に懇願した。この願いはきっぱりと、しかし思いやりを込めて拒絶された。長い話し合いが続いた。彼らは自分たちを支持してくれるようあらん限りの議論をつくし、アメリカ人の人道心に訴え続けた。結局、１艘のボートが降ろされ、送り帰されることになった。２人は穏やかながら多少抵抗したあと、運命を嘆きながら悄然と舷門を下り、小舟が流れ着いたと思われる場所の近くに上陸させられた。

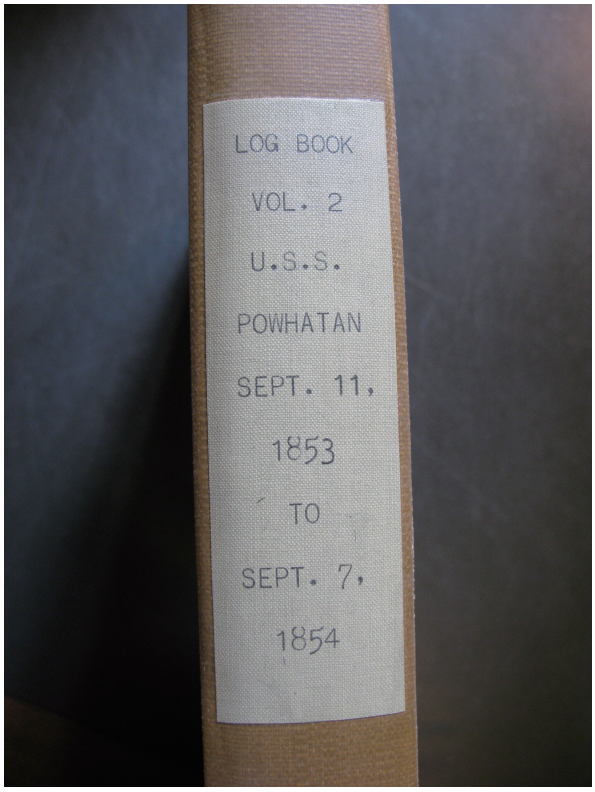

写真１　ポウハタン号の航海日誌第二巻

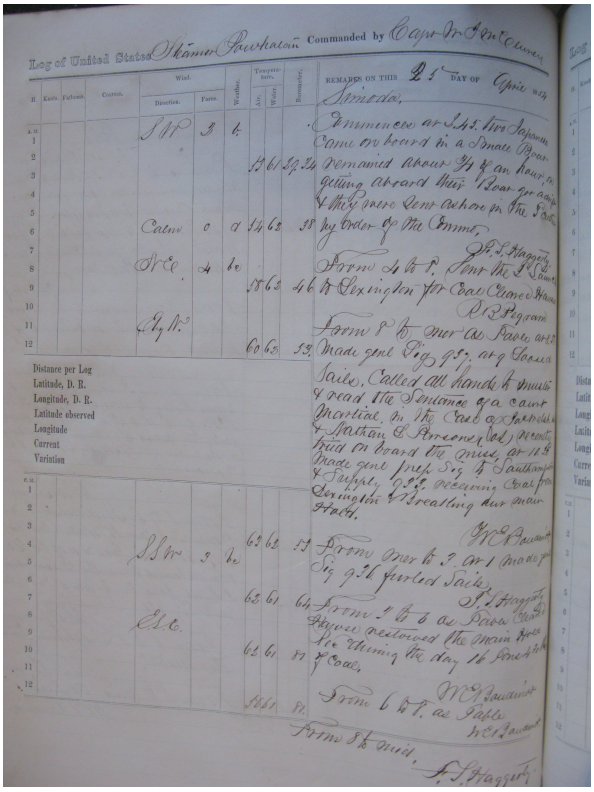

写真２　ポウハタン号の航海日誌第二巻1854年４月25日のページ全体

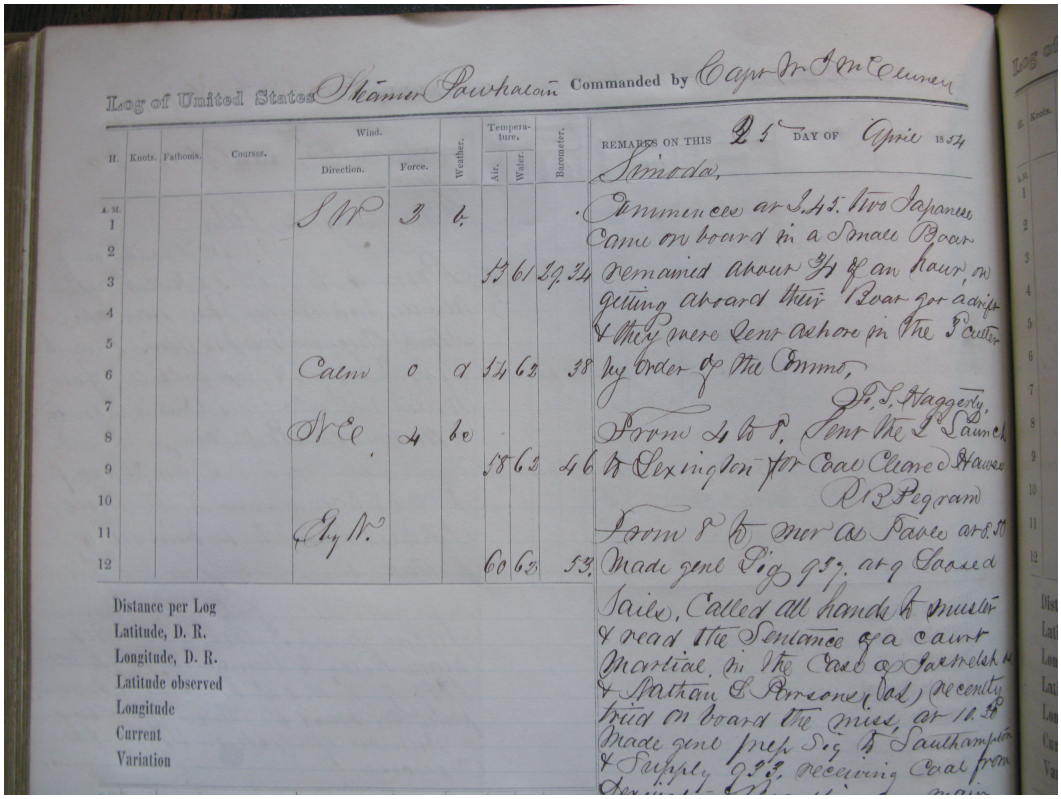

写真３　ポウハタン号の航海日誌第二巻1854年４月25日における密航関連記事（右側）

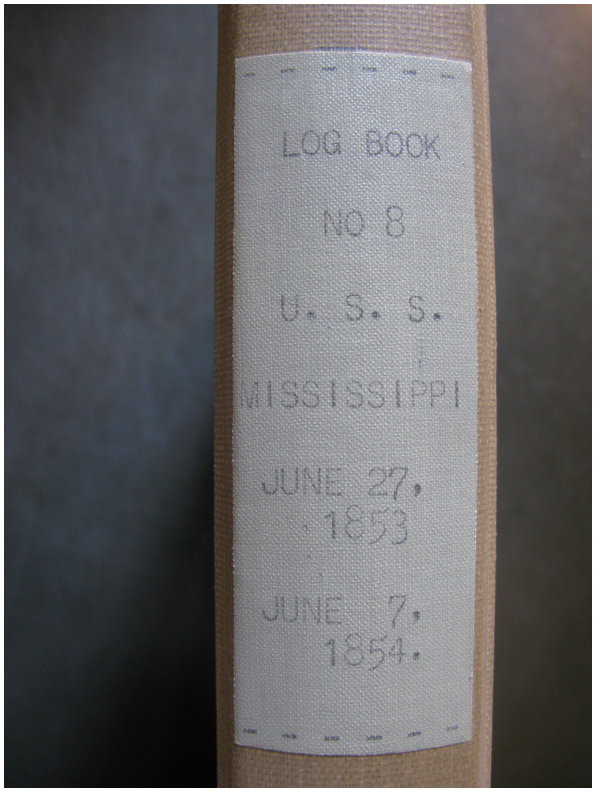

写真 4　ミシシッピー号の航海日誌第八巻

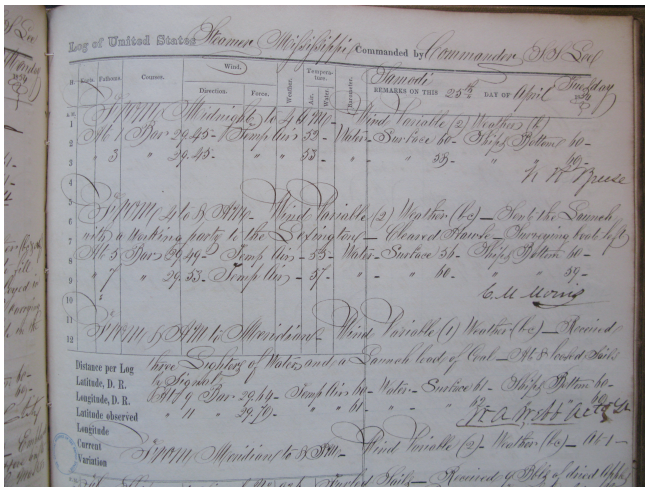

写真 5　ミシシッピー号の航海日誌第八巻1854年 4 月25日

写真 6　David Mengel氏との記念写真

写真 7　Jane Fitzgerald氏との記念写真